2017年09月28日 中日新聞 朝刊西三河版 18頁

長野の間伐材でおもちゃ

愛教大と森林組合 共同開発、販売へ

愛知教育大（刈谷市）と長野県根羽村の森林組合が、村のスギやヒノキの間伐材を用いた「木のおもちゃ」を共同開発し、十一月一日から発売する。森林資源の活用や自然に親しむ心を育てる「木育」につながる取り組みとして期待される。（土屋晴康）

木の球がコトンコトンと音を響かせながららせん階段を転がり落ちる「スパイラルタワー」や、立方体や球体の木材がくるくる回転したり、左右に揺れたりしながら坂を下るおもちゃなどで、計五十種類。

幼稚園や保育園向けに、高さ二メートルほどもある大型商品から、家庭でも遊べるサイズまで用意。木のぬくもりや香りを楽しめるように塗装はしていない。価格は税抜き九千円～十一万九千円。森林組合が受注生産で販売する。

同大幼児教育講座の樋口一成教授（造形）がデザインを担当。樋口教授は、大学院で造形デザインを学んでいたころから、重力の働きでいろんな動きをするおもちゃを研究し、過去にはスイスの玩具メーカーと商品開発をした経験もある。

根羽村とは、森林組合の職員が岡崎市で開かれていた樋口教授の個展を訪れたのがきっかけで、二年前から共同で製作してきた。

根羽村の間伐材でつくった木のおもちゃを手にする（前列左から）大久保村長、樋口教授＝刈谷市の愛知教育大で

樋口教授は「根羽産の木材は肌触り、香りが良く、遊ぶうちに自然と、木の良さに気付くはず」、大久保憲一村長は「根羽村は（西三河を流れる）矢作川の上流部に当たる。木を使っていただくのが源流づくりにつながる」と期待を込めた。

㈲同森林組合＝0265（49）2120

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています